



浦島伝説

令和6年6月21日

第10号

今年の6月23日は日曜日ですが、沖縄県は条例により毎年この日が休日と定められています。なぜ、沖縄では6月23日が休日なのでしょう？

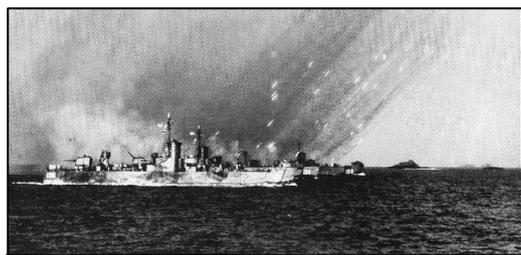
昭和20年、日本は戦争中でした。4月1日、アメリカを主体とする連合軍は約20万人の兵力で沖縄本島への上陸を開始しました。迎え撃つ日本は陸軍約8万6千人、海軍約1万人。アメリカ軍は、沖縄本島上陸前の1週間で約4万発の砲弾を撃ち込み、1,600機の艦載機で爆撃・機銃を加えました。圧倒的な兵力差であり、アメリカ軍は当初1か月で沖縄を攻略する計画であったのに対し、莫大な物量を投入しながら実際にはその3倍の期間を要し、予想外の大損害を被る事になりました。



牛島満司令官

6月23日は、牛島満司令官らが自決し、沖縄における組織的戦闘が終結したとされる日です。

沖縄戦における日本側の死者・行方不明者は約18万8千人。約半数が民間人でした。アメリカ軍側は死者・行方不明者約2万人。戦傷者や戦闘外傷病者を加えた人的損失は投入兵力の39%に達し、アメリカ大統領ら戦争指導者たちは大きな衝撃を受け、のちの日本本土侵攻作戦の方針決定に大きな影響



渡嘉敷島へ艦砲射撃を行うアメリカ艦船



島田勲県知事

を及ぼしたといわれています。沖縄戦は、日本領土における最大規模の地上戦でした。

沖縄戦に関わるある人物を紹介します。

島田勲（あきら）県知事。現在の神戸出身で、中学・高校・大学と、野球に熱中し、中学時代に第1回全国中等学校優勝野球大会（現在の夏の甲子園）に出場。東京帝国大学では俊足の外野のスター選手として活躍するとともに、ラグビー部とも掛け持ちするスポーツマンでした。

卒業後、内務省に入り主に警察部長を勤めます。昭和20年1月、県知事として沖縄への赴任が打診されます。沖縄が戦場になることは明らかでしたが、即答で了承したそうです。任務辞退を勧める親友や周囲の声に対し、島田さんは「私が行かないと断ると、誰かが行かなければならない。私は死にたくないの、代わりに君行って死んでくれ、なんて言えないじゃないか」

「一人でも多くの命を救おう」と着任早々、食料の調達や県民の避難や疎開に尽力します。その姿に沖縄県民は心をうたれます。米軍上陸後は那覇を離れ、県民を引き連れ、南の塹壕に設けた「臨時県庁」を転々としてきました。しかし、どれだけ避難しようと米軍の包囲網から逃れられず、塹壕では食料も尽き、島田は「生き残った県民の命を守るため」に最後の決断を下します。「今をもって沖縄県庁を解散する。どうか命を永らえて欲しい。」と訓示しました。一人一人に「皆は投降してくれ。米軍は殺しはしないから…」と、そう言い残し壕豪を出たきり消息をたちました。

元県庁職員、山里和江さんはこんな証言をしています。

島田知事から「君は生きるんだよ」と言われたが、彼女は当時、「その言葉の意味が理解できなかった」と言います。なぜなら、そんなことを口にするのは「非国民」で、行政の最高責任者が、この言葉を口にしたことが信じられなかった。山里さんは当時18歳。県の防空監視隊に所属し、周囲の大人の中で、「生きろ」などと言う者は一人もいなかった…。

在職5か月足らず。今なお沖縄県民から慕われています。沖縄の高校野球新人戦の優勝カップは「島田杯」と名付けられています。沖縄の高校野球関係者の多くが、甲子園に行くたびに彼の出身である神戸第二中や兵庫高校を訪れるそうです。

最後に、上皇陛下の言葉を紹介합니다。「日本では、どうしても記憶しなければならぬことが4つはあります。終戦記念日、広島原爆の日、長崎原爆の日、そして6月23日の沖縄の戦いの終結の日です。」



島田杯